「ジル、それちょーだい」
「ん？」
午後三時のティータイム。
ローズジャムを入れた紅茶で喉を潤した後、クッキーを摘んで口元に運ぶ。
すると、つい今まで沈黙を保っていたベルの口が不意に開かれ、横から現れた白い歯がこちらの返答を待たず薄茶色の円の端に齧り付く。
そのまましっと口角を上げて笑みを形作った唇は、少しずつクッキーを食みながら近付いてきてオレのそれに触れた。

前触れもなく窓から現れ、部屋に入ってくるなりコートを脱ぎ捨てソファーの隅に身を寄せて。
オレを無視してゴロゴロ丸まってたかと思えば急に自分から近寄ってきて、ホント気まぐれな猫みてぇ。
ぼんやりそんなことを考えていたら咥えていた部分まで奪われ、少し置いて、小さく柔らかくなったクッキー片が代わりとばかりに口の中に押し込まれた。
これを茶菓子にしろってか。
珍しくキスしてきたと思ったら、随分と捨て身な嫌がらせだな。

「ンッ、ん……ンぅ……」
「!?」
そっちがその気ならと、舌で甘い欠片を掻き集めてすぐさまよく咀嚼し、ドロドロの塊にしてベルの口内に戻してやった。
「ん、んむぅ！」
「んんん……ン、く……んはぁっ」
後ろ頭を押さえつけてしっかりと唇同士を密着させ、唾液で滑らせて全てを流し移すと、サッと顔を離して距離を取る。
舌、食い千切られたらたまんねぇからな。
「んーっ……」
「ししし、どーよ。オレ様の唾液ブレンドの味は」
チラと様子を窺うと、ベルは薄ら涙目になりながら口をもごもごさせている。
こりゃ吐き出すかな。
服汚されるくらいならまだいいけど、顔にペッてされるのは勘弁だ。
嫌がらせ返ししてやったから、更にその仕返しをされかねない。
その前に、とベルの様子に警戒しつつ、手探りでテーブルの上のナプキンを探して口元に押し当ててやる。
だけど信じられないことにコイツは口の中のそれをコクン